

妙案が浮かぶとき

東京大学名誉教授 和田 昭允

生来の怠け者である私は、科学者の末席にいて密かに思う。知識を駆り立て、素晴らしい妙案を捻り出す秘策はないか？昔から妙案が浮かぶのは枕上、鞍上、厠上の三上、と言われている。よく言い当てているが、鞍上は良き昔の話で、その後を継ぐ自動車の運転中では考え事どころの騒ぎではない。でも今日では馬の代わりに新幹線が、貴重な時間を提供してくれる。なぜボートとできる環境がよいのか？



あすへの話題

頭の活動には、答を出そうと血眼になつて狭い知識領域を探すと、広い草原や森をブラブラ歩きする気分でなんとなく遠くを眺める、の両方がある。大事なのはブラブラの方で、問題から離れて周りを広く見る。頭の中でアイデアが写る水晶の玉を転がす気分である。尋常ではとても出そうもない妙案がフツと浮かぶのは、そんなときだ。こうして、何かあるな？と第六感にピンときたら大抵の場合、意識下で論理がチャントつながっているものである。これを逃がさず意識の上に、ハッキリ引張りあげ努力をしなければならぬ。そこで頭のスイッチを先に述べた血眼モードに切り替える。

平成24年4月5日

「思い込み」のご利益

東京大学名誉教授 和田 昭允

眼の鱗が落ちるような素晴らしい妙案は、どうしたら絞り出せるのだろうか？「こうすれば必ず成功」という必勝の手はないが、その気になればコツみたいなものはある。それは「思い込まない」と「思い込む」だ。両極端のこれらを臨機応変に使分けするのが、貴方の腕の見せ所である。まず、これまで言われてきた説(常識)を「正しいと思込まない」、つまり疑ってかかることが第一歩。もちろん疑った上で考え抜いた末に、自分なりに納得できる「仮説」を立て、それを検証するのだ。南米とアフリカの両大陸の向かい合う海岸線は、なんだか良く嵌まり合いそうだが、大地は盤石で不動の常識を疑ってみよつ、となつて大陸移動説が生まれた。



あすへの話題

妙案を誘い出すもうひとつのコツは「思い込む」こと。週刊誌などに、枝葉の茂った大木の絵があつて「この木に6人の妖精が隠れています。見つけてください」というクイズがある。そう言われると、それまで気付かなかつた妖精たちが見えて来る。つまり、しかるべき「仮説」を正しいと信じると、頭の隅で恐縮していた気弱なイメージが、元気づけられて出てくるのだ。でも検証は慎重にしないとデッチ上げになってしまうから要注意だ。画期的な発明・発見は独創的な編曲による「知識オーケストラの演奏」だ。したがって旺盛なチャレンジ精神をもって、奇想天外なモノ・コトを編成した仮説を立て、意識下の意識を呼び覚ませよらしい。

平成24年4月12日

暗黙知と形式知

東京大学名誉教授 和田 昭允

知識には暗黙知と形式知がある。一橋大学の野中郁次郎名誉教授が日本企業の目覚ましい知識創造の要因として提出し世界的に評価された、純国産の誇るべき概念だ。暗黙知は、モノやコトについての自分だけの知識(いわゆる洞察、直感、カンで主観的。だから口でハッキリ言えず、文字や式に書けず、他人に正確に伝えられない。一方の形式知は、数式や文章で論理的・客観的に曖昧さなく人に伝えられ、万人が共有できる。たとえば「死」が暗黙知のうち「死んだ人の臓器摘出の社会的合意は難しい。しかし医学と科学技術が力を合わせて、「死」を心電図や脳波という形式知にしたから法律が作られ、皆が納得して臓器移植ができることになった。



あすへの話題

人類は太古から、森羅万象の暗黙知を感じとり形式知に変えてきた。自然のモノ・コトを一義的に翻訳し、共有財産にしたのだ。社会のあらゆる場でもいままも続く「暗黙知→形式知」翻訳は、世界の共通理解と発展の原動力である。個人に生まれた暗黙知は家庭、学校、職場での会話や議論を通じて、互いに解り合える言葉、つまり共通語になる。こうして増え続ける形式知は筋道立てて教科書や解説書にまとめられる。それを学んだ人達の脳裏にまたボンヤリと暗黙知が生まれ……のサイクルを繰り返し、人類の智はラセン階段を登るように高まってゆく。

独創とは、多様な知識の余人には考えおよばない結合だ。であれば頭に暗黙・形式を問わず知を取り込み、組み合わせさせてみる。こうして暗黙知が生まれたら、会話、議論、批判、そして、考え抜くことでハッキリさせる努力をする。知識を詰め込むだけでは、新機軸は生まれようもない。